

国立国語研究所学術情報リポジトリ

倒置構文に関する一考察： 日本語とインドネシア語との比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 正保, 勇, SHOHO, Isamu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001099

倒置構文に関する一考察

—日本語とインドネシア語との比較—

正 保 勇

1. PRO 脱落媒介変数 一序にかえて—

(Chomsky) (1981) によれば、痕跡は単に統率されているだけでなく、適正に統率 (properly governed) されていなくてはならないとし、次のような原則を立てた。

(1) $[\alpha \ e]$ は適正に統率されていなくてはならない。

(2) α が β を統率し、 $[\alpha \neq \text{AGR}]$ の場合、且つその場合にのみ α は β を適正に統率する。

この(1)の原則は、空範疇原則 (ECP) と呼ばれるものであり、ここに現われる統率の概念は次のように定義されている。

(3) Consider the structure(i), : 注1)

(i) $[\beta \dots \nu \dots \gamma \dots \alpha \dots \nu]$, where

(a) $\alpha = X^0$ or is coindexed with ν

(b) where ϕ is a maximal projection, if ϕ dominates γ then ϕ dominates α

(c) α c-command ν

In this case, α governs ν

この(3)の定義から分かるように、統率子の定義が拡大され、 X -bar 理論における X^0 要素のみでなく、COMP 内の NP (wh 句や痕跡) も統率子になれると規定されている。統率子の定義が拡大されたことにより、次の(4)の文法性が説明されることになる。

(4) a. a man [\bar{s} who_i [t_i called John an idiot]]

b. who_i do you think [\bar{s} t_i [s t_i' saw Bill]]

これに対して、次の例では、最大投射である \bar{s} が、who_i と t_i との間に在介しているの、前者は後者を統率することができないことになり、これら二文は、適正に統率されない空範疇を含む文として排除されることになる。

(5) a. *who_i do you think [\bar{s} that [s t_i saw Bill]]

b. *who_i do you wonder [\bar{s} how [s t_i solved the problem]]

前記(2)の原則中の [α AGR] は、PRO 脱落媒介変数と呼ばれるもので、この条件が英語に必要であるのは、先に述べた(5)の例からも分かるように、一般に、英語においては、INFL が AGR を含んでいる場合には、その文の主語が脱落することが許されないためである。ところが、イタリア語では、(5)に相当する文は、文法的であるところから、Chomsky (1981) は、イタリア語では [α AGR] という条件が脱落していると考えている。

そして、英語のように、前述の条件を有する言語を、非 PRO 脱落言語と呼び、イタリア語のように、前述の条件を欠いている言語を、PRO 脱落言語と呼んでいる。

Chomsky (1981) は、最初、英語等の非 PRO 脱落言語において有効である *[that-t] フィルターが、イタリア語等 PRO の脱落言語には当てはまらないという事実は、後者のグループの言語においては、AGR も適正な統率子となりうるという理由によって説明がつくと考えた。又 PRO 脱落言語は、主部と述部が自由に倒置するという特徴を有しているが、この事実も、先程の [that-t] フィルターの場合と同様に、PRO 脱落変数によって説明がつくと考えた。しかし、Kayne が主張するように、ECP は、論理形式部門で適用される原則だと考えると、*[that-t] フィルターは、次のようなより一般的なフィルターに包摂される。

(6) * $[\alpha \dots [s \ t \text{ INFL VP}]]$

(where...is non-null, t is nominative and is the variable

PRO is locally bound by α , and α may be an operator (not necessarily a wh-phrase) or its trace in (COMP)

このフィルターにより、次のフランス語の文(7)は、(8)のような解釈を受けることができない。

(7) *je n'ai exigé que personne soit arrêté

(8) ("for no x, I demanded that x be arrested")

同様に、このフィルターによって、次の英文が排除される。

(9) *who remembers where who bought that book

以上見てきたように、英語やフランス語等の非 PRO 脱落言語においては、このフィルターが有効に働いたが、AGR が空範疇の適正な統率子となり得る PRO 脱落言語においては、主格に立つ variable が、COMP を隔てて、ある演算子 (operator) によって束縛されることが可能であるという予測をすることができる。しかしながら、事実はこの予測を裏切って、このフィルターが PRO 脱落言語に対しても有効に働くことを示している。例えば、次のイタリア語の文(10)は、(11)のような解釈を受けることを予想させるが、実際には、(10)にはこのような解釈は成り立たない。

(10) *non voglio che nessuno venga

(11) "for no x, I want that x come"

この事から、*[that-t] フィルターは、それが PRO 言語であるか、非 PRO 言語であるかを問わず、両タイプの言語に共通に適用されるフィルターであると考えた。そして、このフィルターが有効に働いていないように見える次のような文(12)の深層構造は、(14)であるよりはむしろ(13)であると考えた。

(12) chi pensi che verrà

(13) ("who do you think (that) will come")

(14) pensi [_S che [_S α verrà chi]]

(14) pensi [_S chi verrà]]

つまり、(12)の文における chi は、主語の位置から移動したのではなく、(13)のように倒置して動詞の後に置かれた位置から移動したと考えることに

よって、この一見反例と思える文に対して、解決を与え得ると主張した。又、Chomsky は最初主部述部の倒置が自由に行われるのも、倒置後、主語の位置に残された痕跡が、PRO 脱落言語においては、AGR によって統率されるからであると考えた。

非 PRO 脱落言語は、通常、主語が欠落することがないのに対して、PRO 脱落言語は、主語が欠落することが可能である。例えば、次のイタリア語の文においては、英訳の方に出てくる 'he' に相当する主語が欠落している。

(15) mangia (he is eating)

Chomsky は、Taraldsen によって主張された考えを踏襲し、PRO 脱落媒介変数が、動詞の屈折の豊かさに関連があるという事実に注目して、PRO 脱落言語においては、AGR は、動詞的要素と密接に関係しているために、主語の位置を統率する力が弱いと考えた。つまり、PRO 非脱落言語においては、主語の位置は常に INFL 内の AGR によって統率されるのに対して、PRO 脱落言語においては、[主語の位置は、AGR によって統率されていなくてもよいと考えた。そして、Chomsky は、次の「拡大空範疇原則」と呼ばれる原則からの当然の帰結として、イタリア語のような PRO 脱落言語において、空になっている主語の位置にあるものは PRO であると考えた。そして、ある言語が PRO の主語を取るかどうかは、INFL を動詞句内の最初の動詞要素に付加する規則（今後、これを R と略記する）が統語部門で適用されるかどうかによって決定されるとした。

(16) 適正に統率されている場合、且つその場合にのみ空範疇は痕跡であり、統率されない場合、且つその場合にのみ空範疇は PRO である。

もし、R が統語部門で適用されれば、その結果生じる表層構造は、次のようになる。

(17) NP [vp V-INFL…]

この構造において、AGR をその一部として含む INFL の上にある最初の枝分かれ節点は VP であるので、INFL は NP を構成素統御しないことにな

り、NP の位置に、統御されることのない PRO が出現することが可能となる。これに対して、非 PRO 脱落言語においては、R は音声形式部門においてだけ適用されるので、主語は、表層構造においても論理形式においても AGR によって統御されることになる。

2. 統率束縛理論からみた倒置構文

Chomsky は、主語を欠いているケースと同様に、倒置構文の主語の位置に生じる空所も、空範疇ではなく、PRO であると考えた。つまり、両ケースの場合とも、R パラメーターによって説明がつくと考えた。倒置構文とよく似ているが、これと区別されるものに Burzio が “ergative verbs” と呼んでいる一群の動詞の後に名詞句が続く構文がある。例えば次のような構文がそれである。

- (18) arrivano molti studenti
 (“many students arrive”)

Chomsky によれば、この構文における ergative verb の後に現われる名詞句 (molti studenti) は、動詞句の付加されている (adjoined structure) のに対して、次の (19) のような倒置構文においては、動詞の後の名詞句は、動詞句の内部に位置しているという相違があるという。

- (19) telefonano molti studenti
 (“many students telephone”)

つまり、この二構文の構造上の相違をシェマ化して示せば次のようになる。

(20) は (18) の構造を表わし、(21) は (19) の構造を表わしている。

- (20) [s PRO [vP [vP telefon-AGR] [NP molti studenti]]]^{注2)}
(21) [s PRO [vP arriv-AGR [NP molti studenti]]]^{注3)}

更にもう一つの相違は、倒置構文における動詞の後の名詞句は、PRO の位置か move- α によって移動してこの位置を占めるに到ったのに対して、ergative verb によって作られる構造 (今後これを「能格構文」と呼ぶことにする) における動詞の後の名詞句は、基底部門で最初からこの位置に生成

されたと考えられる。これに関連して、文頭の PRO の出現の過程にも相違が生じる。Chomsky (1981) においては、はっきりと述べられてはいないが、(20) のような倒置構文に現われる PRO は、“*molti studenti*” が動詞句の後に移動したことにより元の位置に生じる痕跡が、派生のある段階で PRO で置き換えられることによって生じたと考えられる。Osvaldo Jaeggli はこのような考え方をしている。

Chomsky は、PRO 脱落言語において、主語の位置に現われる空範疇を、ECP の観点から説明するに際して、最初 PRO-drop parameter を導入し、これにより、PRO 脱落言語においては、AGR も適正な統率子となりうるとした。つまり、この考えにおいては、主語の空範疇は [+anaphor, -pronominal] の素性を有する anaphor であることを前提にしていた。しかし、この考え方では、次の二つの構文に現われる文頭の空範疇の間に区別を設けることができないことになる。

- (22) [NP e] mangia
 (he is eating)
- (22) a. [e] arriva Giovanni
 (Giovanni is coming)
- b. [e] ha mangiato Giovanni
 (Giovanni ate)

Chomsky (1982) においては、これまでの PRO 脱落媒介変数を訂正し、PRO 脱落言語においては、AGR は格付与素性を有するとした。これと同時に、音声形式を有しないという点を除けば、他の代名詞と同じ性質を有する無形の代名詞（以後これを Chomsky の表記にならい *pro* と表記する）を新たに導入した。これは、[-anaphor, +pronominal] の素性を有するもので、これは、これまでに考えられていた次のような三種類の表現 (expression) の欠落部分を埋めるものであり、この *pro* の設定により、[anaphor] と [pronominal] の素性の組み合わせの論理的可能性の全てにつ

いて、それに属す構成員が見つかったことになる。また、(イ)は「 α 」の値として「 e 」をとり、(ロ)は「 α 」の値として「 pro 」をとり、(ハ)は「 α 」の値として「 e 」をとり、これにより、前出の二構文における [NP e] の間に区別を設けることが可能となった。つまり、(22)における [NP e] は、 pro であるとされる。これは他の頭在的代名詞と同じ扱いを受けるので、AGR により格付与がなされる。

しかし、新しい PRO 脱落媒介変数の導入により、以前の「 $\alpha \neq AGR$ 」は破棄されたと考えられるので、この [NP e] は格付与は受けるけれども、適正に統率されないことになる。しかし、 pro は、PRO と共に空範疇から除外されるべきものであり、代名詞と同じ扱いを受けるのであるから、ECP の適用を免れることになる。これに対して、(23)に現われる [NP e] は、いずれも PRO であるとして、(22)に現われる pro と区別をした。但し、(23)の a における [NP e] つまり ergative verb の前に現われる空所は基底部門で生成される PRO であるのに対して、(23)の b における空所は、移動変形により、残された痕跡が、派生のある段階で PRO と置き換えられたものであると考えている。新しい PRO 脱落媒介変数の導入によっても、AGR は依然として統率子であるから、(23)の構文の [NP e] に PRO の出現を許すためには、R パラメーターは依然として必要であることになる。

2.1. 格付与との関係

Chomsky (1981) においては、主格の付与に関する次のような原則を立てている。

- (24) (i) AGR is coindexed with the NP it governs
 (ii) nominative case is assigned to (or checked for) the NP governed by AGR^{注4)}

そして、この原則の (i) は、R が適用されて次のような構造が生じる前、つ

まり、深層構造で適用されると主張している。以下、論を進めるにあたって、この前提を正しいものとして受け入れることにする。まず、倒置構文と、能格構文における主格付与の方法について考えてみる。次の(25)は倒置構文をシマ化したものであり、(26)は能格構文をシマ化したものである。

(25) PROⁱ [_{VP} V-AGRⁱ] NPⁱ

(26) PROⁱ [_{VP} [_{VP} V-AGRⁱ NPⁱ NPⁱ]

この両構文中の NP への主格付与の方法としては、次の二つの方法が考えられる。

イ) 動詞の後の名詞句に格付与を行う。

ロ) 最初に、動詞の前の主語名詞句に格付与を行い、その後で、動詞の後の名詞句と同じ上付き指標を有する PRO から動詞の後の名詞句へと格の譲渡が行われる。

これら二つの方法のうち、イ)を採用した場合、先程の両構文(25, 26)のいずれにおいても、AGR は、動詞の後のを統率し、且つそれと同一指標を有しているので、(24)の前提に何らの変更を加えることなく、動詞の後の名詞句に格付与がなされる。それでは、ロ)を採用した場合はどうであろうか。この場合には、格付与の条件としての統率の条項を放棄せざるを得なくなる。つまり、主語が PRO である場合と、それ以外の要素である場合とで、主格付与の方法が異なることになり、(24)の前提に変更をもたらすことになるので、(24)の前提に変更を加える必要がないという点で、イ)の方法の方が優れていると言える。ロ)による格付与が正しいとすれば、表層構造での格付与は、次のように定式化される。

(27) At S-structure, assign nominative case to NP co-superscripted with and governed by AGR^{±5)}

この格付与によって、前述の(25)と(26)の両構文における動詞の後の名詞句には正しく主格付与がなされることになる。

以上のことから、次の(28)において、 α が語彙的名詞句 (lexical NP) である場合には、この名詞句を動詞の後に移動させることが義務的となることが

わかる。

(28) α [_{INFL} AGR] [_{VP} V…]

何故ならば、Rが統語部門で適用された後の構造は次の(29)のようになるが、

(29) α [_{VP} V-AGR…]

このままでは、語彙的要素である α は、格付与がなされないことになり、格フィルターによって、この構造は排除されることになるからである。従って、 α が語彙的要素の場合には、倒置が義務的に行われなければならないことになる。

次に、主語を欠いている構文における格付与の方法について考えてみる。例えば、次のイタリア語の文の派生に関しては、二通りのプロセスが考えられると、Chomskyは述べている。

(30) mangia

(“ he is eating ”)

この文の深層構造は次のようであると考えられる。

(31) α [_{INFL} AGR] mangi-

この構造にRが適用された場合、その結果生じる構造は、次のいずれかであると考えられる。

(32) PRO [_{VP} mangi-AGR]

(33) PRO [_{VP} [_{VP} mangi-AGR]] PRO]

前者の場合、(28)の α が語彙的要素である場合とは異なり、PROを動詞の後に移す必要はない。何故なら、PROは格フィルターの規制を免れるからである。しかし、この構造を排除しないためには、前に述べた主格付与に関する規則(27)は恣意的な性格のものであるとしなければならなくなる。規則(27)を下に再掲する。

(34) At S-structure, assign nominative case to NP co-superscripted with and governed by AGR

後者の場合、動詞の後にあるPROは、倒置によってこの位置に移った(32)の α であり、文頭のPROは、後に挿入されたもので、これは、非人称的

性格のものであり、動詞の後にある PRO 及び AGR と同一の上付き指標を有するものである。

3. 接語的代名詞

Mario Montalbetti (1982) に従えば、接語的代名詞は、それ自身単独では存在し得ない統語的要素であり、その存在は必ずそれと同一の指標を有する他の要素との関係に依存している。つまり、接語的代名詞と、それと同一の指標を有する他の要素との間には、次の図式によって表わされるような関係があるという。

(35) $cl \dots \alpha$

ここで、 α は *lexical* を表すパラメーターであり、 cl と α の前後関係は、非関与的である。パラメーター α の取る値によって、具体的には、次の二つの形が可能となる。

(36) a. $cl \dots NP$

b. $cl \dots [e]$

(36a) のケースは、いわゆる *clitic 重複構造* であり、(36b) のケースは、主語や目的語の位置に顕示的名詞句が生じない場合である。

Borer (1981) の主張を受け入れ、接語的代名詞は動詞の下位範疇化には関与しないと考えると、投射原則により、(36b) のようなケースにおいては、接語的代名詞と同一の指標を有する空範疇を設定せざるを得ないと Mario Montalbetti は言う。つまり、次のような文において、他動詞 'vio' は目的語を持てなくてはならないが、接語的代名詞の 'lo' は目的語ではないので、動詞の後の目的語の位置に、空範疇を設定することになる。

(37) Juan lo vio [e]

(John *cl-acc* saw [e])

接語的代名詞と関連するこの空範疇の性格については、種々の意見がある。Mario Montalbetti (1983) は、この問題を、PRO 脱落言語における不在主語の内容決定、つまり、不在主語の文法素性の問題と関連させて考えている。

Mario Montalbetti は、動詞の屈折が豊かな言語においては、時制文で pro 主語の出現が許されるが、これは、表層構造でAGRが動詞に付加され、この付加されたAGRから格素性を含む文法素性がproへと譲渡されるからであるとの立場に立っている。Mario Montalbetti は、この場合の素性の譲渡という考えを、接語的代名詞と、それと関連を有する空範疇の場合にも当てはめることができるとしている。まず、Mario Montalbetti は、接語的代名詞と関連する空範疇は pronominal であるとの仮定に立ち、次にそれが、pro であるか、あるいはPRO であるかを考える。この空範疇は、PRO がそうであるように、指示対象が arbitrary でもなく、又、いわゆる control によってその指示対象が決定されるという性格のものではない。この空範疇の内容は、それと同一の上付き指標を有する接語的代名詞の有する素性によって局地的に決定される。その意味で、この空範疇は、PRO 脱落言語の時制文の主語に現われる pro と同一の性格を有していると考えられる。

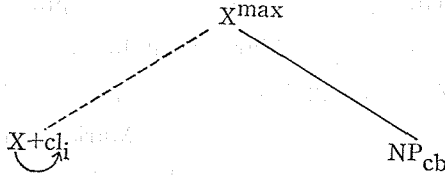
Chomsky (1982) も、接語的代名詞と関連する空範疇を pro と考えている。この考えの基礎には、Mario Montalbetti の場合と同様に、PRO 脱落言語の主語に現われる pro の内容決定の方式とのアナロジーがある。又、Chomsky のこの考えは、「接語代名詞は、それと関連する空範疇を統率し、且つその内容を決定する」という Borer (1981) の理論とも整合する。

Kayne, Rouvet and Vergnaud (1980) によれば、接語化は、anaphor に関する束縛条件に従い、時制文の主語は接語化されないところから、接語代名詞と関連する空範疇は anaphor (NP-trace) であるとしている。しかしこの考えは、Borer (1981) も主張するように、接語的代名詞の占める位置が非項の位置 (\bar{A} -position) であるとすれば、「anaphor は局地的に A-bound されていなくてはならない」という束縛条件に抵触することになる。又、「anaphor (NP-trace) 自身は非項の位置になくてはならない」という条件にも抵触することになる。

Hagit Borer (1981) も、この空範疇を anaphor として扱っている。Hagit Borer によれば、次の図において、接語的代名詞によって束縛され

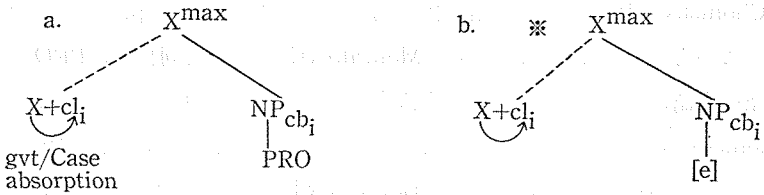
ている位置 (NP_{cb}) が空の場合、この空範疇の性格については、論理的には三つの場合が可能であるとしている。

(38)

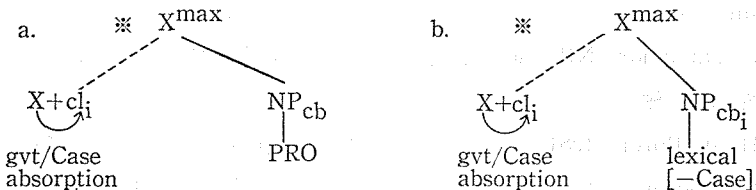


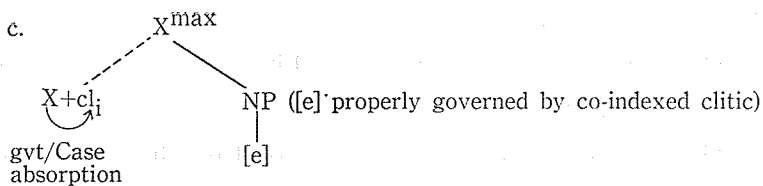
以下にその三つの可能性について述べる。

(39) NP_{cb} は統率されていない位置であり、ここには PRO のみが現われ得る。この位置は、当然のことながら、適正に統率されない位置なので、anaphor (NP-trace) が現われることはない。従って、NP_{cb} の位置からの名詞句の取り出しは不可能である。以上を図示すれば次のようになる。



(40) NP_{cb} は、それを構成素統御し、それと同一指標を有する接語的代名詞によって適正に統率される。従って、PRO も語彙的要素もそこには現われず、唯、anaphor (NP-trace) のみが現われる。NP_{cb} の位置からの名詞句の取り出しは可能である。以上を図示すれば次のようになる。





- (41) 接語代名詞は、Caseのみを吸収し、(適正)統率素性は吸収しない。NP_{cb}はXにより適正に統率される。従って、PROはこの位置には現われず、語彙的要素も現われず。唯 anaphor (NP-trace)のみが現われ得る。NP_{cb}からの名詞句の取り出しは可能である。この仮説が予知するところものは、殆んど(40)が予知するところのものと同じである。従って、で用いられた図はここでも通用する。

Hagit Borerは、現代ヘブライ語、及び、ルーマニア語において、NP_{cb}の位置からの名詞句の取り出しが可能であることを根拠として、先ず、(39)の仮説を斥けている。しかる後に、Hagit Borerは、NP_{cb}と接語的代名詞に与えられる指標が等しいか、等しくないかという点においてだけ異なり、その他の点では同じ二つの構造において、NP_{cb}と接語的代名詞が同一の指標を与えられている方にだけ、NP_{cb}からの名詞句の取り出しが可能である例を、現代ヘブライ語、及び標準アラビア語から取り、これを根拠として、(40)の方が(41)よりも優れた仮説であるとしている。

しかし、この理論も、Kayne (1980), Rouveret and Vergnaud (1980)の理論と同様に、「anaphorは非項の位置にある要素によって束縛されてはならない」という束縛の条件に従っていないという欠点を免れていない。

以上の考えとは異なり、接語的代名詞と関連する空範疇を変項(variable)と考える立場がある。このような考えを取るものに、Robin Clark (1983)とJudith Mc A'nulty (1983)がある。Robin Clarkには、もし接語的代名詞が存在する時には、格の吸収(Case absorption)により、補語名詞は格

付与を受けないという前提に立つと、次の二つの帰結を得るとしている。

(42) 空範疇は格を欠いており、従って LF では見えないので、変項ではあり得ない。

(43) 空範疇は主要部によって統率 (governed by the head) されているので、PRO ではあり得ない。

以上のことから、Robin Clark はもし空範疇が三つに区分されるとすれば、件の空範疇は、上記(42)と(43)で述べられた以外の空範疇、つまり anaphor (NP-trace) であることになる。しかし、パラウ語においては、次のように接語的代名詞があるにも拘らず、直接目的語が前置詞を介さずに現われる接語重複構文が存在する。

(44) Akcholebed-ii a billis
(I hit-it CM clog)

この例は、Borer (1981) や、Kayne (1980) の理論に対する反例となるものである。Borer は、ある句の主要部の Case 素性は、Case, Gender, Person, Number からなる一組の素性として書き出す (spell out) ことが可能であると考えた。そして、主要部の Case 素性が書き出される時には、主要部は Case を補語名詞句 (complement NP) に与えることが不可能となるとした。接語的代名詞は、主要部の素性の一部を成すとされるので、これが存在する時には、補語名詞句への Case 付与が阻まれ、いわゆる格吸収の現象が生ずることになる。Robin Clark は、この Borer の理論では、(44)の例に対する説明を与えることができないとし、接語的代名詞の格吸収の可能性に関してパラメーターを設ける必要があると主張している。そして、パラウ語は、接語的代名詞の格吸収の可能性に関するパラメーターに対して、負の選択を行うと考えた。このように考えれば、パラウ語では、接語的代名詞と関連する空範疇は、格を有していることになるので、この空範疇は、非項の位置にある接語的代名詞によって束縛される変項 (variable) であると考えられるとしている。

Judith Mc A'nulty (1983) においても、Robin Clark (1983) と同様、

接語的代名詞と関連する空範疇を変項 (variable) として扱っている。Judith Mc A'nulty は、接語的代名詞は非項の位置を占めていると考えられるので、変項の条件に適合するが、接語的代名詞による格吸収を認めるとすれば、格吸収の生じた後では、件の空範疇は格を有しないので、「変項は格を有している」という変項に関するもう一つの条件を満たしていないという問題が生じる。この問題を解決するために、Judith Mc A'nulty は、次のような仮説を立てている。

(45) Case Inheritance and Clitic Absorption apply on the left side of the grammar^{注6)}

つまり、格の譲渡や、格の吸収は、音声形式で適用され、論理形式では適用されないとするもので、この前提に立てば、論式形式では、件の空範疇は格を未だ保有しているので、変項としての条件を二つとも満たすことになるとしている。

4. インドネシア語の倒置構文

インドネシア語においては、次にみられるように、自動詞句と主語との倒置は容易に起こり得る。

(46) Datang dia.
 (彼が来た。)

これに対して、次のような他動詞句と主語との倒置は、自動詞の場合と比較すると、その出現の度合は非常に低く、言い忘れた主語を後から補っている感じのする構文となっている。つまり、この場合の主語はいわゆる遅延主語と考えられ、くだけた会話表現としては出現することはあっても、文章語で現われることは滅多にない。

(47) Membaca buku itu dia.
 (彼はその本を読む。)

以上のことから考えると、インドネシア語においては、自動詞の主語は、次のように深層では、動詞の後の位置を占めていると思われる。

(48) [NP e][VP [v datang] [dia]]

この深層構造においては、'dia' が占める位置は θ -position であると考えられる。しかし、'dia' の占める位置は \bar{A} -position であるので、もし表層構造においても、'dia' がこの位置を占めている場合には、どのようにして格付与が行われるかということが問題になる。これに関しては、Luigi Rizzi (1982) が、イタリア語の次のような倒置構文に対して提案した、transmission convention (格の譲渡に関する原則) が参考になると思われる。

(49) e_i INFL_i [VP [VP ha telefonato] [Gianni_i]]

Luigi Rizzi は、イタリア語の INFL が [+ dummy] の素性を有する時には、主語接辞と同じものとみなすことができるので、次の英語やフランス語における 'there' や 'il' の定代名詞の主語が [+ dummy] という素性を受けることができるのと同様に、イタリア語の pronominal INFL も [+ dummy] という素性を受けられると考えた。

(50) There came a man.

(51) Il est venu un garçon.

そして、この [+ dummy] という素性を受けた pronominal INFL は、主格を吸収し、その吸収した格を、後置された名詞句に譲渡するという方式を採用することによって、(49) の 'Gianni' に対する主格の付与を可能ならしめた。Luigi Rizzi による、格の譲渡に関する定式化は、次の通りである。

(52) in the structure

...dummy_i...NP_i...

where NP_i is coindexed with and in the domain of dummy_i
copy the Case of dummy_i on NP_i

しかし先のインドネシア語の例(48)の場合には、自動詞に接語代名詞が付加されていないので、イタリア語の場合と同様に、INFLが [+ pronominal] の素性を有しているとは考えられない。従って、主格の譲渡は、INFL からではなく、主語の位置にある [NP e] から行われると考えなければならない。それでは、この [NP e] はどのような性格の空範疇であろうか。まず、この

[NP e] は、主格を受けることができるのであるから、統率される位置にあるので、PRO ではなく pro であると考えられる。そして、この主語の位置に現われる pro は最初からこの場所を占めているとは考えられない。何故なら、pro 最初から主語の位置を占めていると仮定すると、次のような文の派生に関して、pro を語彙的要素で置き換える変形が必要になってくる。しかし、移動変形 (move- α) は原則として adjunction であって、substitution ではないとの前提に立てば、このような文が派生する途がなくなる。従って、移動変形に関する上記の前提を正しいと仮定すれば、(48)の主語の位置は、派生の段階で必ず何らかの要素によって充填されるべき性格を持った位置であり、LF の段階では、空範疇が生じてはならない位置であろうと考えられる。

(53) Dia datang. 3rd person singular subject NP 3rd person singular object NP 3rd person singular auxiliary NP 3rd person singular verb NP

以上のことをまとめると、インドネシア語では、自動詞の主語は、深層構造においては、動詞の後に生じていると考えられる。この動詞の後の位置は、 θ -position ではあるが、A-position ではないので、この位置にある名詞句が主格の付与を受けるには、文頭の $\bar{\theta}$ -position で A-position である [NP e] の位置へ移動する必要がある。このプロセスによって派生した文が前出の (53)である。ところが、一方これとは別に、(48)のような文も可能なのであるから、このような文においても、自動詞の後の名詞句が主格を受ける方策を考える必要がある。そのためには、どうしても、主格を受ける位置にある他の要素から格を受け継ぐ以外に途はない。そして、この格の譲渡の方式は、Luigi Rizzi (1982) が主張したようなものであると考え、主語の位置は、派生のある段階、つまり、この位置が、自動詞の後にあった名詞句が移動変形により、充填されなかった場合には、その後で、[+dummy] の素性の指定を受ける要素によって充填される必要がある。[+dummy] その後での素性の指定を受けるのは、定代名詞であるとの仮定が正しいとすれば、この位置に pro が来るとする考えにも適合することになる。この [+dummy] の素性を有する pro から格の譲渡は、これ以後の場合にも適用できると考え

られる。例えば、インドネシア語では、ke…an の形が受動の意味で用いられる次のような構文がある。

(54) Sudah ketahuan bahwa dia mencuri uang itu.

(彼がその金を盗んだことは既に知られてしまっている。)

この場合、'ketahuan' が受動の形であるとすれば、Chomsky (1981) が主張するように、この受動形の後に来る名詞句は、目的格の吸収により、この位置では、格付与がなされないことになるので、先の場合と同様に、主語の位置を占めている要素からの格の譲渡が必要になる。つまり、この場合にも次のように派生のある段階で、主語の位置には、'ketahuan' の後にある名詞句と同一の指標を有し、[+dummy] の素性を有する pro が入ってくると考えられる。

(55) pro sudah ketahuan bahwa dia mencuri uang itu

[+dummy]

又、同様に、受動の意味を持つ 'ter…' の形が現われる次の (56) も、派生のある段階では (57)、のような構造を成していると考えられる。

(56) Sudah terbukti bahwa dia membunuh Hasan.

(彼がハサンを殺したことは既に証明済みである。)

(57) pro sudah terbukti bahwa dia membunuh Hasan.

次に、前出の (48) とは異なる派生に過程を経て生成されたと考えられる (58) のような文について考えてみる。

(58) Datanglah dia.

この文において、動詞の接尾辞である -lah は、主部と述部が倒置した時に、述部を強調する目的で付加される性質のものであり、次のような例に現われるものと本質的には同じものであると考えられる。

(59) Sayalah yang minta maaf.

(謝まらなければならないのは私の方です。)

(60) Di sinilah terjadi pemberontakan itu.

(その革命が起こったのは、ここにおいてです。)

以上にみたように、もし -lah が主部と述部が倒置したことを示しているとすれば、先の(58)は、次の(61)=(48)における動詞に -lah がついたとは考えられない。何故なら、この文においては、動詞の後の 'dia' は、主格は受け継いでいるものの、主語の位置は占めていないからである。

(61) Datang dia

(58)の文は、むしろ次の(62)=(53)から、(63)にみられるような、述語動詞が主語を飛び越えて文頭に出る変形により派生したと考える方が自然である。

(62) Dia datang.

(63) Datanglah dia. [vp e]

もしこれを逆に、(62)の 'dia' が 'datang' の後ろに後置して派生したと考えると、次にみられるように、深層構造において 'datang' の後ろの位置を占めていた 'dia' が、主語の位置に移動した時に生じた痕跡を消去することになるので、いわゆる TEP の原則を破ることになるので、好ましい派生方法とは言えない。

(64) $\begin{array}{c} \text{Dia datanglah [NP e]} \\ \text{①} \quad \text{②} \end{array}$

つまり、(62)のような文は、(64)のように主語の後置によって生じたのではなく、(63)のように述部の前置による強調の結果生じたと考えるべきである。

次に、主格接辞が付加された構文について考察を行う。次の例は、全て深層構造における目的語と考えられるものが、文頭に位置しているものである。

(65) Sepatu itu kubeli.

(その靴は、私が買った。)

(66) Sepatu itu kaubeli.

(その靴はお前が買った。)

(67) Sepatu itu dibelinya.

(その靴は彼が買った。)

これらの構文における動詞の形はいわゆる人称形と呼ばれるものであり、こ

の人称形の構文についてはさまざまな考え方がある。その一つの考え方は、これらの構文を、西欧諸語における受動態と同じものであるとするものである。深層構造における目的語が主語の位置を占めているという点では、目的語が受動態の形態素により格吸収され、しかる後、これを主語にするという受動態の持つ、主語産出機能に適合していると言える。しかし、このような受動態説に対しては、多くの反論が考えられる。その一つとして、もしこれらが全て受動態変形によって生じたと仮定すると、次のような形は存在し得ないはずである。

(68) Kubeli sepatu itu.

(69) Kaubeli sepatu itu.

(70) Dibelinya sepatu itu.

何故ならば、これらの形は、正に、受動態と考えられる文が派生される基となったと考えられる深層構造そのものの形を成しているからである。動詞の受動形態素が Chomsky が主張するように目的格の吸収を行うという前提を受け入れるとするならば、これらの三例における 'sepatu itu' は、格を有しないことになり、case filter によって、これらの文は非文法とされることになる。しかし実際には、これらの三つの形は、前出の(65)、(66)、(67)の形と並んで存在する。

又、Sandra Chung (1976) におけるように、これら三つの形を全部同じように扱うのではなく、区別を設ける必要があると考える意見もある。Sandra Chung によれば、一人称の人称形と二人称の人称形には、三人称の人称形の場合には見られない、制約があるという。それは、前二者の前に現われる要素は、定名詞か若しくは総称的な意味で用いられる名詞に限られるのに対し、後者については、その前に現われる要素に関しての制約はないという。つまり、不定名詞が後者と共に用いられる(71)は可能であるが、不定名詞が前二者と共に現われる(72)及び(73)は非文法的文であるという。

(71) Sebuah buku dibelinya.

(72) *Sebuah buku kubeli.

(73) *Sebuah buku kaubeli.

又、英語の受動構文の 'by' と同じように、単独では θ 役割を与えることのできない 'oleh' という前置詞は、三人称の人称形にしか現われないという事実も、これら三その形の中に相違があることを窺わせる。Sandra Chung は、これらの三つの形の中に区別を設ける必要があると主張する。Sandra Chung によれば、一人称と二人称の人称形の現われる構文は、一種の主題化が起こった構文であるのに対して、三人称の人称形の現われる構文は、西欧諸語の受動構文に相当するものであるとしている。もし前二者を主題化変形と考えた場合、次の(74)は、(75)のような深層構造から派生したと考えられる。

(74) Mesin mabil itu kuperbaiki.

(75) [COMP][NP e] kuperbaiki mesin mobil itu

一人称と二人称の人称形が受動形態素でないとすると、目的格の吸収は生じないと考えられるので、(75)における 'mesin mobil itu' は、目的格が付与されることになる。そうなると、'mesin mobil itu' が移動する先は、case filter によって、 \bar{A} -position に限定されてくる。COMP も \bar{A} -position であるから、移動先としてこの場所が先ず考えられる。しかし次のように、COMP の位置を占めていると考えられる疑問詞の左に、'mesin mobil itu' が現われることができるという点を考えると、'mesin mobil itu' は、COMP の左にある TOP 節点に位置していると考えられる。

(76) Mesin mobil itu kapan kauperbaiki?

(その自動車のエンジンはいつ修理したのですか?)

以上のことを総合して、(74)の構造を図示すれば次のようになる。

(77) [TOP mesin mobil itu]_i [COMP][NP kuperbaiki][NP e]_i

そして、この場合、'mesin mobil itu' は、A-position から \bar{A} -position へと移動しており、元あった場所 ([NP e]_i) は格付与がなされる位置なので、残された空範疇は、変項であると考えられる。(76) のような場合には、'mesin mobil itu' は TOP の位置にあると考えられるが、(74)のような場

合には、後で見るように、'mesin mobil itu'の位置に関しては修正が必要となる。(74)の形とは別に、以前は、この形の倒置形と考えられていた次のような文も又存在する。

(78) Kuperbaiki mesin mobil itu.

Robin Clark や, Judith Mc A'nulty が主張するように、接語代名詞は、それと関連する空範疇を束縛していると考えれば、(78)における'ku'は、次のように主語の位置にある空範疇つまり変項を束縛している。

(79) [NP e] [VP [V kuperbaiki] [NP mesin mobil itu]]

従って、このような仮定に立てば、次のように、深層構造において主語の位置にあった' mesin mobil itu' が動詞の後に移動するのは不可能である。

(80) [NP e] [VP [V kuperbaiki] [NP mesin mobil itu]]

また、仮に、次のように、深層構造で TOP の位置を占めていた' mesin mobil itu' が動詞の後の位置に移動したと考えると、移動後に TOP の中に残された痕跡は、適正に統率されないことになるので、この可能性も排除されることになる。

(81) [s [TOP e]_i] [s [COMP] [s [NP e] [VP [V kuperbaiki] [NP mesin itu]_i]]]]

以上のことから、' mesin mobil itu' を、主語の位置から移動させる方法も TOP の位置から移動させる方法も適当ではないことが分かる。従って、もし(78)の形が(77)や(80)の倒置したものであると考えられないとすると、残る派生の方法は、(78)の形は、深層構造においてもこれと同じ形をしており、この深層構造が基礎となって、主題化された(74)の形が派生すると思われる。すると(78)の文における' mesin mobil itu' は、深層構造でもこの位置を占めていると考えられるので、この位置で格付与がなされる必要がある。従って、一人称、二人称の人称形は、主格の吸収は行わず、目的格の吸収は行わないと考えられる。主格の吸収が行われていることは、次のように、主語の位置に、接語代名詞と同一指示の代名詞が現われることができないことによって分かる。

(82) *Aku kuperbaiki mesin mobil itu. (私は修理した車は、誰の?)
 それでは、(74)の形が、(78)から派生したと考えると、目的格の付与を受けた 'mesin mobil itu' の移動する先はどこであろうか。まず、主語の位置が考えられるが、この位置は、接語代名詞の ku- によって束縛される変項によって占められているので、この位置に 'mesin mobil itu' を移動させることはできない。そうすると、残る場所は COMP ということになる。COMP の位置は \bar{A} -position であるので、移動後に残された空範疇を変項と考えれば、COMPの位置に移った 'mesin mobil itu' が、元あった場所に生じた空範疇の変項を束縛することになるので、束縛条件にも、ECP にも抵触することはない。(78)に移動変形が掛った後の形を図示すれば次のようになる。

(83) $[[\text{TOP } t_i]] [\bar{s} [\text{COMP } \text{mesin mobil itu}] [s_{\text{NP } e}] [\text{VP } [\text{v kuperbaiki}] t_i]]$
 (私は修理した車は、誰の?)

しかしながら次のような例を見ると、この解決法には問題があることが分かる。

(84) Dari mana buku ini kamu pinjam?
 (あなたは、どこからその本を借りたのですか?)

(85) Kapan rumah batu itu kamu beli?
 (あなたは、いつその石の家を買ったのですか?)

もし、インドネシア語においても、疑問詞は COMP の位置を占めていると考えると、これらの文においては、COMP の位置に二つの要素が入っていることになり不都合を生じる。従って、残る方法は、COMP と、接語代名詞によって束縛される主語の位置との間に、移動地点を設けることである。もし、被移動要素が、それを含む文に娘付加されれば、(74)の構造は、次のようになっていると考えられる。そして勿論、移動先の地点は \bar{A} -position となる。

(86) $[[\bar{s} [\text{COMP } Q]] [\text{NP}_1 \text{mesin mobil itu}] [\text{NP } e] [\text{VP } [\text{kuperbaiki}] t_i]]$
 (私は修理した車は、誰の?)

この場合、移動後に残された空範疇は変項であり、 \bar{A} -position の位置に移された 'mesin mobil itu' によって束縛されていると考えられる。

次に、(87) のような文の派生を考えてみる。もしこの文が、Sandra Chung が主張するように、西欧語の受動文に相当するものであると考えると、di-nya の形態素は、目的格の吸収を行い、di-nya の前の位置、つまり、'mesin mobil itu' が移動後に占める位置は $\bar{\theta}$ -position で A-position であると考えられる。

(87) Mesin mobil itu diperbaikinya.

(その車のエンジンは彼によって修理された。)

上記の仮定に従えば、この文の派生は、次のように、深層構造(88)に受動変形が掛り、表層構造(89)になったと考えられる。

(88) [_{NP} e] [_{VP} [_V diperbaikinya] [_{NP} mesin mobil itu]]

(89) [_{NP_i} mesin mabil itu] [_{VP} diperbaikinya] t_i

以上のことをまとめてみると、一人称と二人称の二称形においては、動詞の前の要素は、主語の位置ではなく、その前の \bar{A} -position を占めているのに対して、三人称の人称平の場合は、動詞の前の要素は主語の位置を占めることになる。しかし、次のように、先程仮定した深層構造と同じ形を有する文も存在する。

(90) Diperbaikinya mesin mobil itu.

'di-nya' が受動の形態素であるとの仮定に立てば、'mesin mobil itu' は、この位置では、目的格の吸収を受けるので、これに格付与を行うためにはどうしても、主語の位置からの格の譲渡が必要となる。つまり、(88)のような基底構造に、受動変形が掛らなかった場合には、主語の位置に pro を派生のある段階で挿入し、この pro から主格の付与を受ける方式が必要である。しかし、この方式による格の譲渡が機能を果たすためには、主語の位置が pro によって充填されている必要がある。従って、次のような構文においては、'untuk' によって導かれる補文の主語は、PRO であると考えられるので、このような場合には、'mesin mobil ini' に格の付与がなされないと

いう予測が成り立つが、実際、この予測通り、この文は非文である。

(91) *Mobil ini susah untuk PRO diperbaikinya mesinnya.

(この自動車は、彼が修理するのは難しい。)

これに対して、一人称と二人称の人称形については、動詞の後の要経は、目的格の吸収を受けることはないから、三人称の人称形の場合とは異なり、主語の位置にどのような要素が充填されるかということには関係なく、目的格を受けることができるので、次のような構文は文法的であるという予測が成り立つが、実際、この予測通り、(92)と(93)は文法的な文である。

(92) Mobil ini susah untuk PRO kuperbaiki mesinnya.

(この自動車は、私が修理するのは難しい。)

(93) Mobil ini susah untuk PRO kauperbaiki mesinnya.

(この自動車は、あなたが修理するのは難しい。)

しかしながら、(91)の文における 'diperbaikinya' を 'diperbaiki' で置き換えた次の文は、文法的であるところから、接尾辞 -nya を欠く形は、目的格の吸収が行われない場合もあり得ると考えられる。

(94) Mobil itu susah untuk diperbaiki mesinnya.

又、次は、Intisari, No. 206からの例であるが、この文における 'dilakukan' を、もし 'dilakukannya' とすれば非文法的文となる。

(95) Petugas kesehatan menemukan tiga mayat yang dipindahkan untuk dilakukan autopsi.

(保健所の所員は、三体の遺体を発見した。そして、それを司法解剖するために移した。)

4.1. 二種類の変項

前節で、次の文における移動語残された空範疇は、変項であると考えた。

(96) = (74) Mesin mobil ini kuperbaiki [NP e]

又、次のような主題文において、-nya は、主題によって束縛される変項としての resumptive pronoun であると考えられる。

(97) Mobil itu dia memperbaikinya.

(その自動車は、彼が修理した。)

しかし、この主題文を次のように変えると、非文法的文となる。

(98) Mobil itu dia memperbaiki.

又、この文における 'mobil' を底名詞として、他の部分を関係節化した次の文も非文法的である。

(99) *mobil yang dia memperbaiki

しかし、底名詞と照応する resumptive pronoun を残した次のような形は文法的である。

(100) Kita mendirikan negara Indonesin, yang kita semua harus mendukungnya.

(我々は、我々全てが支えなければならない国家インドネシアの建設を行っている。)

もし、関係節化と主題化変形が移動変形を含むと考えると、移動が不可能な場所には、変項として resumptive pronoun が現われ、移動が可能な場所には、空範疇としての変項が残ると考えられる。そして、この二種類の変項は相補的分布を成すと考えられる。このような仮定に立てば、(96)の文に現われる空範疇の変項の位置に -nya が現われないのも首肯できる。何故なら、この変項は移動によって生じた空範疇であるからである。これに対して、(97)に現われる resumptive pronoun の変項は、基底部門で生成されたと考えられる。

5. 日本語の倒置構文

日本語には、次のように、主題や主語が後置したように見える文がある。

(101) 「ほかに、どんなことを、なさったの？お姉様は」

(有馬頼義、「風熄まず」)

(102) 「その娘の子どもを殺したんだな、初江が…。」

(阿刀田高、「ナポレオン狂」)

原口庄輔(1973)においては、これらの構文を、英語等の右方転位変形 (Right Dislocation) と同じ変形が掛ったと考えている。英語の右方転位変形が掛った文は、通常、転位した要素が元あった位置に代名詞を残す。次の例においては、'the administrators' が文頭の 'They' の位置から、文尾へと転位したと考えられる。

(103) They spoke to the students about financial problems, the administrators.

これに対して、日本語では、次の例に見られるように、転位した要素が元あった位置に、必ずしも、代用名詞を残す必要はなく、むしろ無い方が普通であると考えられる。

(104) 加藤君が(あいつに)会ったんだよ、あの交通事故をおこした課長に。

(105) (あいつは)どこかへ行ってしまったよ、うちのどら猫は。

原口庄輔は、日本語にも、英語と同じ右方転位変形を仮定する根拠として、次のようなものを挙げている。

(イ) 右方に転位される名詞句は、先行の文中の諸要素との間に選択制限を保っている。

(ロ) 右方転位された名詞句は、もとの文中での正しい格助詞を伴う。

(ハ) 敬語の場合も、もとの文中の敬語が、転位された名詞句に引き継がれる。

以上のような右方転位説に対して、井上和子(1978)は、次のような点において、右方転位文は、左方転位文や主題文とは異なっているとしている。次に、その相違点と、同書の中で挙げられている例を下に示すことにする。

(イ) 右方に転位される名詞句は格助詞を伴うことが多い。

(106) 加藤君が(あいつに)会ったんだよ、あの交通事故をおこした課長に。

(107) (あいつは)どこかへ行ってしまったよ、うちのどら猫は。

(ロ) 代用名詞はあってもなくてもよい。(106)及び(107)に見られる通

り。)

(ハ) 名詞句に限らず、副詞・形容詞・その他の修飾語も転位できる。

(108) 学長が廊下を歩いていたよ、ゆっくりと一步一步たしかめるように。

(109) 子供たちは変った模型がほしいのです、日本にないような。

(ニ) 右方転位は繰り返し適用することができる。

(110) 加藤君が出しました、願書を ICU に。

(ホ) 右方転位は、代用名詞が残らなければ、不特定名詞句でも転位できる。

(111) 会社は求人中です、タイプのできる女の人を。

井上和子は、これらの特徴は、左方転位文や主題文には見られないものであるから、右方転位を受けた要素を後置された主題と考えることはできないとしている。又、日本語では述語の後には、通常、終助詞しか現われないので、右方転位の文のためにだけ、特別に、深層構造に転位された句が入る位置を設けることは適当でないとしている。更に、もし右方転位を認めれば、それは、述語の後への移動の唯一の例となるので、この点からも、右方転位説は望ましくないとしている。そして、(101)のような文は、移動規則によって生じたものではなく、前半の文で省略された要素を文末で繰り返すことによって生じたと考える。

久野暲(1978)も井上和子(1978)と同様の考え方をしている。久野暲は、後置文が移動規則により作り出されたものではないということを示す一つの証拠として、このタイプの文が、Ross(1967)で述べられている移動規則に関する制約に従わないことを挙げている。Rossによれば、従属文の構成要素を文末方向に移動する規則は、その従属文の境界線を越えては適用しないという汎言語的制約があるという。しかし、久野暲の挙げる次の例は、この原則に従っていない。

(112) [何食べたか] 覚えているかい、この間、あのレストランで。

以上のような事実から、久野暲は、この後置文は、後置された要素が確認の

意味で付け加えられている場合には、井上和子の提案するように、前半が省略文であり、後半が、省略された要素の繰り返しという構成になっていると考えても差し支えないとしている。しかしながら、後置文には、前半に何らかの省略が行われたとは考えにくい次のような形も存在する。次も久野暲(1978)からの例である。

(113) 山田は馬鹿だよ、あいつは本当に。山田は馬鹿だよ、あいつは本当に。

(114) その本を見せて下さい、その机の上にある本。その本を見せて下さい、その机の上にある本。

これらの後置文においては、後置要素は、補足的インフォメーションを与える機能を果たしている。これらの文は、移動規則によって派生したと考えることは困難であるし、又、井上和子の主張するように、前半で省略された要素が後半で繰り返されていると考えることもできない。そこで久野暲は、後置文は、前半も後半も省略文であるとの見解を示している。彼によれば、(115)の文は、(116)のような深層構造から、括弧に入った部分が省略されてできた文であるという。

(115) 馬鹿だよ、山田は。馬鹿だよ、山田は。

(116) 〔山田は〕馬鹿だよ、山田は〔馬鹿だよ。〕〔山田は〕馬鹿だよ、山田は〔馬鹿だよ。〕

そして、前半部の省略は、先行する言語的文脈、あるいは非言語的文脈による談話的省略であり、後半の省略は、前半の「馬鹿だよ」を先行詞とした、言語的文脈による構文法的省略であると考えられる。

確かに、久野暲のような考えに立てば、後置文を移動規則によって派生するよりは、基底部門への修正を行う必要がないという点において、後者よりも優れていると言える。

次の例は、これまで見てきたものとは異なり、後置文の後半部が、形の上でも独立した文を成している。

(117) 「僧で、ございますわ。相遠寺の、跡取りの」「僧で、ございますわ。相遠寺の、跡取りの」

(有馬頼義、「風熄まず」)

(118) 「よくおやすみでした。強い薬を使いましたから」「よくおやすみでした。強い薬を使いましたから」

(渡辺淳一、「幻のささやき」)

これらの文における仕切りの句点を取り払えば、これまで見てきたものと同じ後置文に入ることになる。久野曄が主張するように、後置文の後半部が前半の文で省略された要素の繰り返しではなく、前半の文で言い落とした要素を付け加える働かしをしているとすれば、後半部の前半部への依存度は低く、むしろ、後半部も独立した文を成していると考えた方がよいと思われる。後置文の後半部においては、前半部で現われた要素を省略するのが原則であるとする、前半部と後半部を合わせると、偶々一つの完結した文となるような場合には、一文内における倒置のように見えるけれども、先に見た(117)や(118)のような例があることを考えると、後半部自体が独立した文となっていると考えた方がよいように思われる。そう考えれば、次のような文における下線部と後置文の後半部とを同じように扱うことができる。

(119) しかし神を信ずることは神の愛を信ずることは——とうてい彼にはできなかつた。あのコクトオさえ信じた神を！

(芥川龍之介、「或る阿保の一生」)

(120) もし僕の神経さえ常人のように丈夫になれば、——けれども僕はそのためにはどこかへ行かなければならなかつた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、…… (芥川龍之介、「歯車」)

(121) あの金糸雀は妻が世話してゐてくれたのです。私は唯見るだけが役目でした。見ては奥さんを思ひ出すことが——。

(川端康成、「感情装飾」)

(122) 森のなかへ馬車がかけていると、小鳥たちはおどろいてとび立った。けたたましく鳴きあい一せいに歌いながら。

(三島由起夫、「苧菟と瑪耶」)

(123) 苧菟はけんめいに瑪耶をみつめていた。瑪耶にそれを知らせ、それを肯ずかせようとするかのように。

(三島由起夫、「苧菟と瑪耶」)

これらの例のうち、最初の三例は、下線部が先行の文で言い足りなかつた要素についての敷衍・詳述となっている。又、残りの二例では、下線部が先

行の文で言い落とした要素の補足となっている。これらの両機能は、後置文の後半部においても見られたものである。従って、この点においても、後置文と、今上に述べた五つの例のような文との共通性が見出される。

又、次のような例における下線部は、専ら、言い足りなかった要素についての敷衍・詳述のために使われる形であり、独立性が強いので、前半部とは、通常、句点によって仕切られ、これに対応する後置文の形を見出せないものである。

(124) それを瑪耶に告げる時まで、彼のなかのあるものが彼の口を噤ませた。……予めひとりごちていたらその持つ怖しさに気づこうもの。
(三島由起夫、「苧菟と瑪耶」)

(126) 「そうだわ。曾根明男さんがいいわ。あなたも知っている人だし……」
(星新一、「ノツクの音が」)

この二例のように、文としての独立性が強く、専ら先行する文の敷衍・詳述のために特化している形を除けば、後置文と、その後半部が独立の文を成している形との間には、形態上及び後半部の受け持つ機能上の並行性が見られるので、後置文の後半部も、独立した文とみなすことができると思われる。

以上のように、後置文の後半部を、ある要素の省略が起こった独立した文であると考えると、後置文の後半部における省略は、次のような例における「うちでも」の後に起こっている省略と共に、広い意味での、先行文脈との関係による同一要素の削除という現象の中の一つと考えられる。

(126) ええっ？ いつかカラコルムで一カ月サルマタを取り替えなかったとあってたけど、うちでも？

(遠藤周作，北杜夫，「狐狸庵 VS マンボウ PART II」)

又、次の例は、この種の削除が必ずしも義務的ではないことをうかがわせる。

(127) 見える。はるか向こうに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。
(太宰治，「走れメロス」)

これまで、日本語に省略現象を認めるという前提に立って論を進めてきたが Roberta Hendrick Krueger (1983) が指摘するように、日本語が、non-

configurational な言語であるとの前提に立てば、表層構造はそのまま深層構造を表わしていると考えられるので、移動変形もあり得ないし、省略変形を認めることもできなくなる。このような考え方に立てば、日本語の後置文が倒置文でないのは当然の帰結である。しかし、このような考え方に立たずとも、後置文を移動変形によって生じたと考える立場には、以上見てきたように、種々の難点があるので、どの前提に立つにせよ、日本語の後置文を移動変形によって派生したと考えることはできない。しかしながら、佐藤ちゑ子(1983)のように、日本語に省略現象を認めず、従来、省略と考えられてきたものを自由語彙化仮説によって説明しようとする立場を採れば、後置文の前半部も後半部も省略された文ではなく、他の理論に従えば、省略されたと考える部分は、深層においてもその箇所に語彙の挿入がなされなかったと考えなければならない。いずれの分析法が優れているかということは、それ自体で独立した研究を必要とする重要な問題ではあるが、本論には直接の関係有しないので、この問題に立ち入ることはしない。

注

1. Noam Chomsky (1981), p. 250
2. Noam Chomsky (1981), p. 261
3. loc. cit.
4. Noam Chomsky (1981), p. 259
5. ibid. p. 264
6. Judith Mc A'nulty (1983)
7. Luigi Rizzi (1982)

参 考 文 献

1. Araki, Kazuo, et al., (1982), 『文法論』(現代の英文法 第一巻), 東京: 研究社。
2. Belletti, Adriana. (1982), "'Morphological' Passive and Pro-drop: The Impersonal Construction in Italian," *Journal of Linguistic Research* Vol. 2 No. 4.
3. Borer, Hagit. (1981), "On Extraction from Clitic Doubled Construct-

- Extensions," *NELS* 11.
4. Borer, Hagit. (1981), *Parametric Syntax*, Cinnaminson, U.S.A.: Foris Publications.
 5. Chomsky, Noam. (1981), *Lectures on Government and Binding*, Cinnaminson, U.S.A.: Foris Publications.
 6. Chung, Sandra. (1976), "On the Subject of Two Passives in Indonesian," in Charles N. Li, ed., *Subject and Topic*, New York: Academic Press, Inc.
 7. Clark, Robin. (1983), "Clitics as \bar{A} -Binders," *Cornell Working Papers in Linguistics* No. 4.
 8. Haraguchi, Shosuke. (1973), *Remarks on Dislocations in Japanese*, Unpublished, MIT.
 9. Inoue, Kazuko. (1978), 『日英対照 日本語の文法』, 東京:大修館書店。
 10. Jaeggli, Osvaldo. (1982), *Topics in Romance Syntax*, Cinnaminson, U.S.A.: Foris Publications.
 11. Kayne, Richard S. (1980) "ECP Extensions," *Linguistic Inquiry*, Vol. 12, No. 1.
 12. Krueger, Robert Hendrick. (1983), "Non-configurational Pro-drop Languages: A Look at Parametric Intersection in GB Theory," *CLS* 19.
 13. Kuno, Susumu. (1978), 『談話の文法』, 東京:大修館書店。
 14. Makino, Seiichi. (1980), 『くりかえしの文法』, 東京:大修館書店。
 15. McAululty, Judith. (1983), " \bar{A} -Binding," *Cornell Working Papers in Linguistics* No. 4.
 16. Montalbetti, Mario. (1982), "Clitics and Empty Categories," *Proceedings of the First West Coast Conference on Formal Linguistics* No. 1.
 17. Nakazima, Heizo. (1984), 『英語の移動現象研究』, 東京:研究社。
 18. Rizzi, Luigi. (1982), *Issues in Italian Syntax*, Cinnaminson, U.S.A.: Foris Publications.
 19. Rouveret, A. and J.-R. Vergnaud, (1980), "Specifying Reference to Subjects: French Causatives and Conditions on Representations," *Linguistic Inquiry*, Vol. 11, No. 1.
 20. Safir, Ken. (1983), "Missing Subjects, Post-verbal Subjects and the Definiteness Effect," *Proceedings on ALNE 13/NELS 13*.

21. Safir, Ken and David Pesetsky. (1981), "Inflection, Inversion and Subject Clitics," *NELS* 11.
22. Sato, Chieko. (1983), 「日本語の省略と自由語彙化仮説」, 『月刊言語』 Vol. 12 No. 6, 東京:大修館書店。
23. Teller, Laurice. (1982), "Null Subjects and Objects in Hausa," *Journal of Linguistic Research* Vol. 2 No. 2.
24. Yamaguchi, Tadao. (1982), 「スペイン語変形文法」, 『海外英語学情報』 第1号, 東京:大修館書店。
(1983), 「スペイン語統語論」, 『海外英語学情報』 第2号, 東京:大修館書店。